師範學校編輯

小學讀本

一

ホ 2
5718
1

2
5718
1

師範學校編輯

小學讀本

卷一

明治七年
八月改正

文部省刊行

41-6423

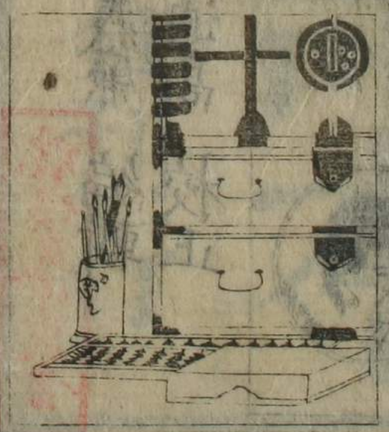
小學讀本第一

第一

凡地球上の人種
ハ、五ツに分きたり、
亞細亞人種、歐羅
巴人種、馬來人種、
亞米利加人種、亞
弗利加人種、是な

田中義廉　編輯
那珂通高　校正

り、日本人ハ亞細亞人種の中なり、」
人ニ、賢きものと、愚なるものとあるハ、多く學ぶ
と學ばざるとニ由りてなり、賢きものハ世ニ用
ゐられて、愚かるものハ、人ニ捨てらるゝこと常
の道なれバ、幼稚のときより、能く學びて、賢きも
のとなり、必無用の人とゝなる
ことなかるべき
幼稚のときハ、先日用什器の、
名と記して、其用ゐ方と、知る
べし、○筆ハ字と寫し、又畫と



寫そ具なり、○算盤ハ、物を數ふる、用ニ供ス、○文
庫ハ、書籍を納ゝ、箱なり、○簞笥ハ、衣裳などを
入ゝ器なり、
又平生食べきもの〻、名と記し、これを調理し
て、食物とゝ法を、知るべし、
○食物とゝ、べきものゝ、種
々なり、
第一ハ、穀物なり、○穀物とハ、
稻、麥、豆、粟、黍の類とハ、○此
等ハ、皆田畠ニ、作りそ、其實と

取り、或は炊き、或は炙りて、食物とそなる なり、

第二は肉類なり、肉類とは魚鳥獸肉の類とい ふ、此等は或は炙り、或は煮て食物とそなるなり、

第三は菓なり、菓は葡萄、梨、梅、桃、柿、橙、蜜柑の類 といふ、此等は多く、生にて、食し、又鹽に漬けて食物とそ なるもあり、

第四は菜蔬の類なり、此等 は畠に、植ゑ作るものと、野に、 自生そなるものとあり、多く

は煮て食し、又鹽漬とそなるもあり。凡て菜は葉 と根とを食物とし、又實と食物とそなるもあり。

此の如く、平生用ゐる食物、什器とを能く心と留 めて、忘るゝことなかるべし」

人の業には、種々ありて、其學ぶべきところ、各異 なり、然れども、先書を讀み、字を寫し、物を數ふる ことを學ぶを、第一の務とし、これを、普通の學と いふ、この學を、為さゞれば、何ぞの業をも習ふ こと能はず、

故に人は、六七歳に至れば、皆小學校に入りて、普

通の學より、從ふべし、○小學校は、士、農、工商とも必學ぶべきの業を授くる所なり、

學校より到りては、何事も、一心より、師の教に順ひ勉強して學ぶべし、

何事を學ぶにも、勉強を第一とす、勉強せざれば學問に上達をすること能はず、

一事にても、記し得ざる所は、能く心を用ゐて怠るべからず、

初より、多く記せんとせば、却て忘るゝものなり、故に怠なく、日毎に一事を記し得て、忘れざる

ときは、其記し得たる所の事、自歳と共に積もりて、多きに至るべし、

他人の、一たび讀む所は、百たびも、これを讀み、他人の、十たび習ふ所は、千たびも、こゝを習ふべし、

○斯の如く、勉強して、怠りなければ、必多く事を記し得らるべきなり、○愚なるものは、多く事を記し得るときは、無用の人たることを免るべし、

學校にては、授業の暇に、遊歩の時間あり、此時間には、遊歩場に出でゝ、身を動かし、心を慰むべし、○怠なく、勉強したる後に、遊歩をすることなり、

樂となるものなり、

故に遊歩と、樂とせんとて、もたゞ、授業の時間に怠らく、勉強をべし、

遊歩場に出でゝ、男兒の戯れ、種々たりとゝも、決して危き遊とびなんべうらず、○輪と、廻いし、紙鳶と、飛ばし、球と、投ぐる等と、宜しとす、○朋友相集りて、遊ぶときに、自擅ふして、他人の樂を妨ぐべからず、

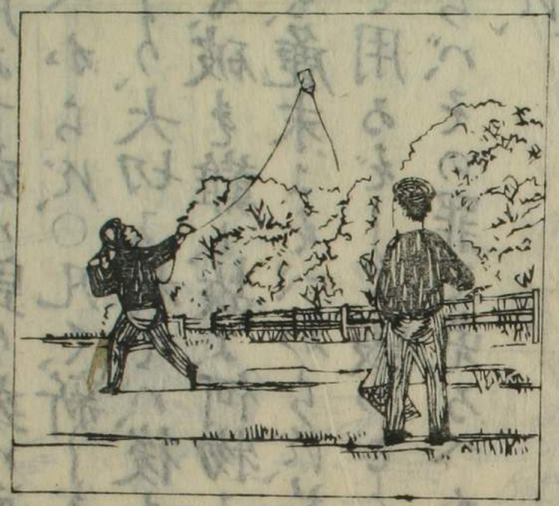
女子の遊に、男兒と、異りて、走り旋るあどの、戯とびふをべからず、○朋友と、伴ふひて、遊ぶ時に、心と和らげて、何事も親〳〵をべし、

第二

我等に、河の中にて、遊びんとす、岸の邊に、水淺きゆゑに、水に入りて、遊ぶことを得べし、○河の、正中に、深きゆゑに、遊ぶべからず、若し深き所に沉

むときハ復出づること、能ハざるべし、○汝の衣裳ハ濕ひたきに陸ゝ上りて、これを乾をべし、○汝ハ、この小舟ゝ乘らんとするゝ、○小舟ハ覆へゝ易き故漫ゝ乘るべからず、もし過つ時ハ水ゝ、陷りて其命を失ふことゝなるべし、

此兒ハ新しき紙鳶を持てり、○彼が、糸を持ちて走ると見よ、○彼ハ紙鳶を高く飛ばせんと、思ふと、○汝も、紙鳶の颺るを、欲そるゝ、○紙鳶の颺りたるときハ、能く心を用ゐよ、○糸の樹ゝ纏ふことなるべし、



○其舊き帽ハ破きゝるゆゑゝ新しく買得たる彼ハ新しき帽を持てり、

ある、○新しき帽とゞ、心を用ゐて、或ハ毀り、或ハ濡すべからゞ、○凡て、新しき時より、大切ニ持てゞ、後までも、破れ難し、故ニ、何物ニそも、麁末ニもべからゞ、若心と用ゐぞして、毀つことならべ、その罪と免るべからゞ、

此猫と見よ、恣ニ、臥床の上ニ、坐せりられしき猫

とゞ、許をべつらゞ、○汝ハ、猫と、追ひ退くることと、得べしや、○否手と出さゞ、必猫ニ噛まるべし、○猫ハ、他所ニ追遣るべきう、又此所ニ留め置べきう、○猫ハ、此室の中ニ、留め置と雖、臥床の上ニ、上ることと、汝ハ、此猫の鼠と捕るゞ見

たりや、○見たり、夜間よ、鼠と、捕ふること、屢なり、」
汝い小舟よ、乘きる人と、見たりや、彼い、何如ようて、其舟と、行るや、○彼ハ、櫂と、以て、小舟と、漕げり、」
群兒、相集り、毬と、投げて、遊び居きり、○彼等の棒と、持てるハ、投げさる毬と、受留ると、以て、樂とをるなり、若其毬と、受留ること、能ハざ

る者とハ、負とをるなり、○此毬い、柔ようて、堅きものよりハ、ざるゆゑ、人よ、中りても、傷くことなし、○此い善き遊なれとも、熱き日よハ、早くとれと、止めよ、酷しき熱さ、觸ることき、身と、害ふと、以てなり、」
大陽の、昇りたるときハ、我、來きるなりと、思ふべし、

等の、起き出づべき、

○大陽の昇りたる、後までも、猶寢所に臥そこと
ありき、○我等い、大陽とび、見ることを得ざるも、
其出づると、見ることなし、○
汝い、大陽の、赤きと、見たりこ
と、なりや、大陽の、赤きときい、
大抵、早そるものなり、」
これハ、林檎の樹なり、○汝い
此樹の、蕾と、見さりや、○此樹
ハ、紅き蕾滿てり、此蕾と
ば、取るべからず、○暫、過ぐれ

ば、其蕾、皆開き、美しき花
となるのみあらず、後に
ハ、實と結びて、其味甘き
果となれば、なり、」
彼兒ハ、牝雞と養へり、○
雞ハ、穀物を、食ちること、
速なり、○これ、嚙むこと
なくして、呑むが故なり、
然れども、喉の下に、餌袋
といふものあり、呑みた

第三

彼女い鳥を捕へて籠ゑ入れ置けり、○此鳥い馴きたりや、又時としていい噪ぎ暴るゝこともなり

る穀物も先づ此袋ゑ入り、さいゝゑ暫く停りて、そをきよりゝ漸く入るものなり、

や○此鳥今い馴きられども初いよく暴きたり、○汝い鳥の聲を聞くことを、好むゝ又好まざるゝ、○吾い鳥の聲を聞くことを、好むのみならば、又其形を見ることを好やゝ、○此鳥い籠より出づることを願へるゝ、○若籠より出づるとも再歸り來るべきゝ、又其まま飛び去るゝ、○凡て鳥い自由ゑ山林ゑ遊ぶ

ことを好む故に籠より出づることを願ひ、一度出づるときは再歸り來ることなし、」

我い惡しき小兒と、好まざるゆゑ、これと遠ざけんとす。○惡しき小兒にても、吾へ、これと、打ち傷くることなし、然れども、共に遊ぶことを、好まざるあり、」

とは、彼子い、彼小女の為に、親切なりや、○然り、彼子の、親切なることい、小女の、躓き倒るる為に手と

執り導くと見ても知るべし、○彼二人い道に迷ふべきか、○否、彼子ハ能く道と知れるゆゑに、二人とも、道に迷ふことなし、○彼等い、林の中を過ることを恐るるか、○否、恐るることなし、○小女の母い、彼子の恐ることを、知りて、これを任せたるゆゑに親切に導きて、家に在ると同じく安全なるしむる

ゐり、○若又家ゑ、歸らんとそるときハ、自在ゑ、歸ら得らるべし、

汝ハ杖を携へたる老人と、見たるゑ、○彼老人ハ、路傍の、石の上ゑ、息ひ其手と、杖の上ゑ、置けり、○彼の顏と、其白髮かるゑ由りて、年老たると、知り、又年老たるゑ由りて、體の屈みたると、知まり、○何ゑ由りて、彼ハ杖と携ふるや、○老人ハ、杖の為

ゑ、歩行そ、杖なくてハ、歩行し難し、○彼ハ、年老たれども、起つことと、歩行そろことハ、得べし、然そ

ども、急ゑ、走ることと能ゑず、時々、途上ゑ、休そて、息て續ぎ、杖ゑ頼りて、徐ゑ、歩行そろなり、」

爰ゑ、五人ゐり、○汝ハ、此人の、年老たると、知まりや、○此人ハ、白き髭あきべ、老人ゐるべし、○此人等ハ、手ゑ杖と持ちさろ、老人と、同ぐく、年老たり、

○然きども、其身は猶壯健あるゆゑに、杖に頼らずして、自在に歩行をることと、得るなり、」

彼等の、持ちたる、笛の名とは、何といふぞ、○此は、喇叭なり、○彼等は、樂隊の、兵卒ゆゑに、此笛と、吹くことと、鍛錬をるなり、○此笛は、兵隊の、行列と、整ふる、合圖に用ゐ、又は、祝日の音樂に、用ゐるものあり、○此笛は、管長くして、先の開きたるものゆゑに、聲

を發をること、最大なり」、汝は、此人の、服紗の中に、あるものと、書冊なりと、思ふか、○否これは、卷物なり、○然らば、書冊の、次第と、數ふるとき、何故に、卷一、卷二と、云ふや、○この唱は、漸に、轉まるなり、古は、只卷物にして、書冊あらざるゆゑに、卷一、卷二、と、呼びうしと、其後、今の書冊、出來りて

も、猶昔の唱ふ、治ゞへるあり、」
良き老人ハ、我ゞ好ミよ隨ひて、問ふ所と、教へ、又能
く、小兒と、愛をるゝ、○然り
彼ハ小兒の善きものと、愛
をれども惡しき小兒とハ
決して、愛をることなし、○
善き小兒ゝきハ好ミて、何
事をも、教ふるあり、」
汝ハ、此女子と見たるゝ、○何故ゝ其手と、上げて
とるや、○彼女子ハ籠ゝ鳥と入き置きゝれども

心と、用ゐることと、深からざ
る故ゝ、鳥と養ひ得ず、彼籠
と持と、即其鳥、逃げ去りて、
直ゝ、林の中ゝ飛び入りた
るゝり、○此とき、驚きて手
と擧ぐとも、再捕ふること、
能ハされハ、何の用ゝも立
つべからず、○彼の鳥と、逃がしたると、吾ハ却て、
甚喜べり、鳥ハ、自由ゐることと、好むものなれハ
なり、」

汝ハ鳥の性を、知まりや、○鳥ハ木ゝ在ることを、好みて、巣を造り、兒を、養育す、○鷦鷯ハ小鳥ゝて、棘の間ゝ、巣を營み、鸕鷀ハ水鳥ゝて、水の邊ゝ、巣を造るなり、○かゝる鳥ハ、頭ゝ毛冠なり、○そゝて、諸鳥の、林間、又ハ水ゝ、ふれば、これを捕へて、苦むべし、

上ゝ、遊ぶハ、天然の性ふるハ、善きことゝ、いゝ、

第四

此女子ハ、愛そべき人形を、持てり、これ等ハ、遊ぶゝ宜しき、具なり、必大切ゝ、弄ぶべし、○人形を、舞ふときハ、静ゝ、動かして、毀るべからず、

母ハ、小兒ゝ向ひて、何まの、人形を、求めんとをるやと、問ふゝ、小兒ハ、自好む所を、指し示せるなり、○此小兒ハ、人形のみを、弄びて、倦めるときゝは、何事をなゝや、○毬を、弄ぶことを、好むふるべし、

○此店ニ列ねたる品ハ、皆小兒の、好むものゝふきども、此小兒ハ、静なる、娘ゆゑニ、人形と、愛して能く心と用ゐこれと損ひ毀ることゝふし、梟ハ、終日密樹の枝ニをり、夜ニ入きハ、始めて飛び翔るなり、○此鳥ハ、眼力甚強きゆゑニ、晝間ハ、却て物を見ることゝ能わず、暗夜ニ、明ふることゝ、人の、能く日中ニ、

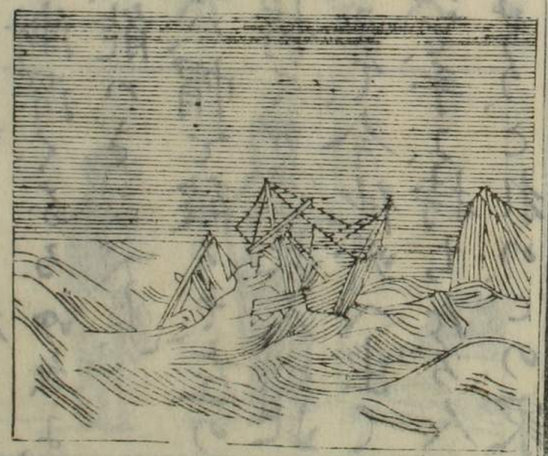
物を見るが如し、」

馬ニ乗まる、人あり、○汝ハ、馬ニ乗ることと好むか、○我ハ、馬ニ乗ることと、好めり、然れども、彼の如く、疾く走ることと、好まず、徐ニ、歩まそることと好めり、

○此馬ハ、何故ニ、疾く走るや、○馬ハ、彼ニ鞭うつゆゑニ、其痛ニ堪へぞして、疾く走るなり、」

爰ニ小船ト、大船アリ、小船ニハ、二本ノ檣アリ、大船ニハ、三本ノ檣アリ、汝ハ、檣ノ用ヲ知ルヤ、○檣ハ凡テ帆ヲ揚グル為ニ、設ケタルナリ、○汝ハ、海ヲ渡ルニ、小船ニ乗ルコトヲ、好むか、○風吹きて、浪の立つ時ハ、我ハ、船ニ乗りて、海ヲ渡ルコトヲ、好まず、其覆らんことを、畏るゝ、ゆゑなり、○これハ、蒸氣船ナリヤ、○否、蒸氣船ニアラズ、帆前船ナリ、

爰ニ、暴風の日、海上ニ浮ビ、ゐる船アリ、檣モ、折レ、帆モ、破れて、甚危き狀アリ、○此船ハ、帆前船ナルベシ、もしも、蒸氣船ナレバ、斯ル難ニ、罹ルこと少ナカラン、○これハ、軍艦ナリヤ、○否、商船ナリ、船の腹ニ、炮門ナキヲ、見て知るべし、



此小兒ハ、幼年ナレドモ、水の深き所ニ、入ルこと能ハズ、○此小兒ハ、何となさんとスルヤ、○こ

れハ蓮の、小き葉と、大ふろ葉と、採らんとをるなり、○わし岸より遠く離れて、行くときハ水も、漸深くなるゆゑよ、歸ること、能ハざるべし、

一人の男ハ、帽と被りて、左の手ふ杖と持てり、○此人ハ此家の、主人にて、今他所へ出て、行かんとする狀なり、○帽と手ふ持ちたる人ハ、上着と着ぞして、肘と見ハせり、これハ、この家

の僕にして、事とをんよ、便なるがゆゑなり、○僕ハ今主人の、出で行きて、後よも、終日、空しく、暮すことを、欲せざるして、其為そべき事と、問ふところなり、

人ありて、草と、積み上げたり、此草の、乾きたると、枯草と云ふ、○枯草ハ、車ふ載せて、これと馬ふ、引ろせ、直ふ、小屋ふ運び入る、○草ハ、枯まて、乾くと、待ち、速ふ、

小屋は、運び入るべし、もし雨は、遇ふ時は、再濡るるものなきべかり、○此枯草は、牛馬の、食とあれべし、○馬は、枯草と、麥とを、食それども、甚最好むものは、麥なり、

人は、耳、目、口、鼻なり、○鼻は、香を嗅ぎ、耳は、聲を聞き、口は、食を味ひ、又思ことを言ひ、目は、物を見るものなり、○鼻と、口と

は、只一つにして、目と、耳とは、二つなり、○耳と、目とは、二つありて、口は、一つなれども、見聞く如くは、言語を多くそべからば、二つの足とあれども、口は、少くして、業を、多くそべ

○又人は、二つの手とは、二つの足とあれども、口は、只一つゆゑ、話を、少くして、業を、多くそべ

第五

鶴は、大なる鳥にして、雛の間は、其羽毛、茶色なれ

ども、生長して、後は、雪の如く、白くなるあり、○この鳥は、長き頸と、長き脛あり、○此鳥の卵は、大きくして、白きものあり、○此類の鳥を、涉水鳥といへり、淺水を涉りて、魚蟲を食とふ、せども、水上に、浮ぶことなく、夜は、樹上に、眠るゆゑなり、

學校に、教師入り來たり、數多の男兒と、小女子とあり、○此小兒等は、皆書を讀み、字を習へり、○校中には、石盤と、机と、書籍とあり、○汝は、學校に、行くことを、好むか、○汝は、書を讀み、又語を綴ることを、能くせや、○吾は、書を讀むことを、好めども、未だ能く、讀むことを、得ず、

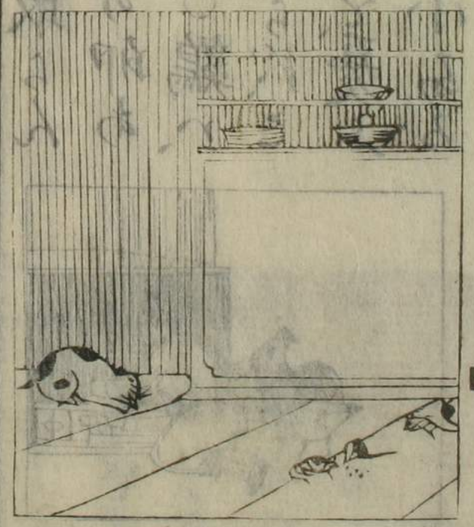
今日は寒き日なり、○雪は一様に地上に積もきり、○小兒は冰の上を滑べることを好む、○此遊は、甚危きものゆゑ能く、心を用ゐざれば、ころべらば、○もし顛び倒るゝことあらば、身を傷ふべし、○賢き小兒はかゝる危き遊を好むことなく、只遊歩場に於て、遊ぶのみ」

此兒は手を伸べて、卵を取らんとす、○巣の中には數多の卵あり、○きゝは鷄の卵なり、○鷄は巣の傍に在りて飛び去らざるゆゑなり○鷄の卵は小なるものと、大なるものとあり、其種類の異なるゆゑなり」

瞿麥と桔梗との花あり、○小兒は桔梗の花を採り娘は瞿麥の花を手に持てり、○瞿麥の花を多

く紅色なり、○桔梗の花ハ、紺色なり、瞿麥ハ多種ふきども、概夏ハ花と開くなり、」

數多の鼠あり、鼠ハ、日中ハ、出ることなし、○夜半ハ至りて、各出でゝ、遊べり、○此出でゝ、遊ぶときハ、梁と行き、棚ハ登り、



厨ハ入りて、食類を竊ミ食ハ、○然きども、猫の聲と、聞くときハ、驚きて、一時ハ、靜まり、忽穴の中へ、逃げ入るなり、○故ハ猫の、居ら處ハ、出でて遊ぶことなし、」

爰ハ馬車ありて、數多の小兒と、女子とと、載せたり、○汝ハ、此小兒と、女子とと、知まりや、○これと知まり、○こ

れハ、皆我學校ニ來る人なり、○彼の犬ハ、馬と同じく、走まろ、○彼等ハ、汝と見たりや、彼ハ吾と見るときふ必其帽と脱く、故ニ我も亦其時ニハ、帽と脱ゞさることなし」

この箱の中ニ響あり、○汝ハ、此響と、何ぞと、思ふや、○此箱の中ニ、ゐるハ鼠ぞ、ゐるハ、猫なるべし、汝ハ、何なりと、思ふや、○この響甚小なるゆゑニ、吾ハ小き鼠

なりと、思へり、○凡て響ハ、其物ニ應じて、度ニ過ぎざるものなれバ、猫ハ、ゐるゝだ、大なる鼠も、ゐるゝだと、思へり」

愛ニ四人の小兒ゐり、二人ハ、坐して、二人ハ立てり、○一人の老人ありて、此小兒等ニ、神の話と、説き聞かさんとす、○老人云ふ、凡て人ハ、神と敬して、我身の、幸と願ひもとなるハ、善き道と、

行ふべし、○善き心と、持ちて善き道を、行ちんことを欲せば、小兒の時より、學問を勤むべし、○學問して、壯年に至り、毫も過なきときは、自神の助と得べし、

爰に杖を携へたる老人ありて、足も不自由にして、目も矇くなれり、然れども、此老人も、初は小兒にて、今の汝等の如く、疾く走りまわり遊び戲れしなり、○今は足も顫

ちろ〳〵ゆゑに、小兒の肩に倚りて、立てり、○見よ此老人は、これと、一年に、譬ふれば、冬の時候の至きるなり、○汝等も、冬の時候に至らざる前に、學問を、勤めて、世間の利益を、考へ出ざるは、春の萬物を、生長せざるが如くなれば、爰に、槻の大木あり、○汝は此木の年を經たる數を知きるか、○此木の、年と經さる數を、知らんことを、欲せば、横に、切りて、木理の輪を、數へ見るべし、○木理の輪は、

年毎に、一つの外は、生ぜざるものなれば、輪の數て其經さる、年の數と、知らるゝなり、」

汝等、毎朝、早く起きて、神を拜し、先づ今朝まで、無難に過ぎたるも、神の賜ありかゝ夜明くる毎に、日光を、給ふふりして、父母の、恙なき顔を見ることを、得るも、皆其恩ありと、謝べし、○さて其後に、吾を導きて、幸を與へ、過無らんことを、祈るべし、」

第六

此人等は、小舟に乘り、網を以て、魚を捕り、海濱に、歸まるなり、○網を、海上に、引きて、魚を、捕ふるとき、鱗あるも、鱗ふきも、大なるも、小ふるも、同じく、其中に、入らざるもの

ふし、○汝ハ此處ヨ居ル、三人の男ト見ルヿヤ、○又彼等の、捕ヘタル、數多の魚ヲ見ルヤ、○海中の魚ハ、其種類多くして、大なるものと、小なるものと、良きものと、良からぬものとあり、○一人の男ハ、小さくて、良からざる魚とバ、取りて、海中へ投げ入れ、○一人い大なる、魚と、籠ヨ、入れ、所なり、○入れたる、魚の、此籠ヨ、滿ちたるときハ、我が家ヨ、持ち歸るなり、

此地と、何如ふる處と、思ふぞ、○花園あり、○此處ヨ數多の、美しき、花あり、○左の手ヨ、鍬と、持ち右

の手ヨ、帽と、持ちたる、小兒あり、小兒の、後ヨ、杖と、持ちたる、娘あり、○汝ハ、此園と、此小兒と、娘との、為ヨ、設けたる所ありと、思ふか、○又この小兒等ハ、喜びて、遊ふと、思ふか、○一人の、娘ハ、瓜と、入れたる、籠と、持てり、○汝ハ、花園ヨ、遊ぶとき、漫ヨ、花と、折り、又、果と、取るべかりし、

爰ニ果ヲ摘み入れきゝる籠にり、○この果ハ葡萄と梨子ふり、○籠の外ニ掛りゝるハ葡萄の蔓なり、○其影ハ籠の左ニ在り、然れば大陽ハ何れきの方ニ、いりといふことと、知きりや、○大陽ハ籠の右ニ、いるべし、

此畫ハ、日の出の景色なり、○今日ハ晴きゝる天氣ゆゑニ、啼く鳥ハ、木より木ニ飛び遷る、○草ハ、青々として、葉ニ露と帶ゝり、○數多の農夫ハ野

ニ出て、或ハ畠と耕し、或ハ草を芟きり、○農夫ハ晴きゝる、日ニハ、必野ニ出て、働くものと、知るべし、晴し晴天ニ、働ゝざれば、霖雨ニ、遇ふとき、耕もことと、得ざして穀菜と得ることなし、

今ハ、日中ニなりたり、○大陽の、照らし處ハ、甚熱し、然れども、樹の蔭ハ、較凉

しきゆゑよ、卧したる牛と、立ちさる牛あり、○又一匹の牛は、熱さと、消せんが為よ、河よ行きて、水を飲まんとす、○河の上よ、橋たり、○人は、日中よ、ありさるゆゑ、皆晝飯を、食そる為よ、家よ歸きる、

日暮よ、なりたり、○人は、野より、歸り來る、牛は、庭よ、

る、○一人の女は、庭よ出で、牛の乳を搾り、桶よ、滿たしめて、これを、牛酪よ、製せんとす、○此時、男子は、晝間芟りたる草を、積み、又干し置ける、穀を、收めんが為よ、極めて、忙し、今日もし務を、果さゞるときは、明日の業よ、妨なるがゆゑあり、」

神は、常よ、我を守るゆゑよ、

吾ハ獨ヨテ、暗夜ヨ、歩行そるをも恐ろ〳〵ことなし、○又眠ろ〳〵ときも、神の、守りたるゆゑヨ、暗き所も恐ろ〳〵ことなし、○神ハ、暗き所も明ヨ見るものゆゑ人の知らざる所と、思ひて假ても、惡しきことをなせバ、忽罰と、蒙ふるなり、○人の、知らざるとも、神ハ、能く知るゆゑヨ、善きものハ、幸ヨハ、禍と、與ふるなり、

第七

汝ハ、物と、數ヘ得るか、○父もし、汝ヨ、十一の、林檎と、與へて、母も、また五ツの、林檎と、與へたるときハ、幾箇の、林檎と、得たりと、思ふや、○十六の、林檎ふり、○然り、汝等ハ、物と、數ふることと、學ぶべし、○大ふる數と、小き數とと、知るべし、○汝ハ、石盤又ハ、紙ヨ、數字と、書得るか、○もし數字と、

書き得ざれハ務めて、これと書しことと學ぶべし、
○物の數と、知らざるハ愚人なり、

盆の上よ、十一の梨あり、この中、母ハ、三持ち去れり、然らバ、殘りたる、梨子ハ幾個とあるや、○殘りたるハ、八ッあり、

汝等ハ文字と書き得るか、○文字と書き得るときハ、書狀と、人より、贈ることと能たず、○このゆゑよ、

汝等ハ文字と書くことと學ぶべし、
汝等ハ文字と、讀み得るか、
○文字と讀むことと知らされバ、人より、贈らるる書狀とも、讀むことと能たず、○又書籍と、讀み得ざるときハ、事と、知ることと能たず、○事と、知らざる人ハ、縱ひ才ありと雖、用よハ、適せざるかり、○ゆゑよ、文字と、讀むこ

とて、知らざる者と、同じく愚人といふなり、○されば、汝等は、務めて、文字を、讀むことを學ぶべし、」

馬は、實用に、適をべき、畜類あり、陸地に、於て、荷物を、運ぶに、馬無くては、不便なり、○馬は、畜類の、大なるもの、まて、顔長く、鬣あり、○背の上に、荷を負ひて、遠きに、輸るもあり、人を載せて、速に、走るもあり、又車を、引くも

あるあり、」

牛も馬と、同じく、實用に、便なる、畜類にして、能く、車を、引き、又は、荷を、負ひて、遠きに、輸るものあり、○されども、牛は、人を、乘せて、走ること、能はず、○牛の肉は、食物となりて、能く、滋養となり、又牝牛より、は、乳汁を、齊り、取ること

を得るなり、」

汝の着さる衣服は何といふ織物ぞや、○上衣は、糸織にして、羽織は、黒羅紗なり、○汝は絹と、木綿と、羅紗の中に、何きぞ、尤暖なるものと、思ふや、○羅紗は、毛織ふまこと第一に暖なり、其次に木綿と、絹も、又其次なり、」

爰に、白き單衣と、紺色の單衣なり、○汝は、何きと暖なりと、思ふや、○白き色は、太陽の熱を、引くこと、少きゆゑに、夏は涼しと雖、冬は寒し、○紺色は、太陽の熱通ひ易きゆゑに、冬は暖なりと雖、夏は、暑し、○人々、夏は多く、白衣を着、冬は多く、紺色の衣裳を着るは、この理によりてなり、」

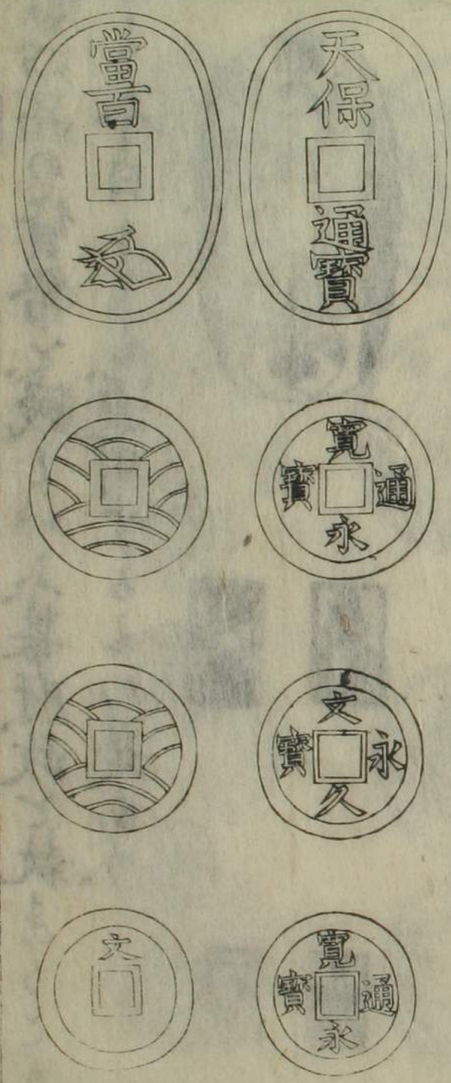
爰ニ、二枚の圖あり、皆人の、働く狀を、畫けり、○初の圖ハ、田ニ下だりて、秧を、植るところあり、○この人ハ、肘も、脛も、露たせり、これ働くニ、便なるゆゑなり、

次の圖ハ、稻を、刈りて、我家ニ、持ち歸る所なり、○

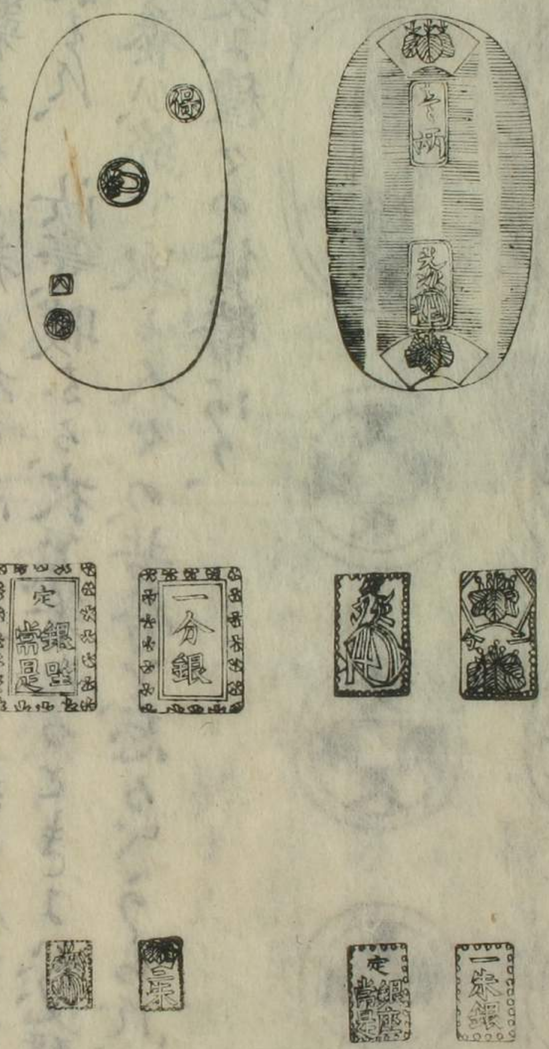
働かざれバ、穀物を、得ることなし、○汝等、穀物を、食する毎ニ、農夫の、苦勞を、想ひ、粒々、皆辛苦より、出でたるを、知りて、其業を、怠るべからず、

又稻を、將きて、米を、取る所を、見るべし、○此人々の、衣ハ、汗ニ、濡ひて、乾くときなし、○農夫ハ、此の如く、

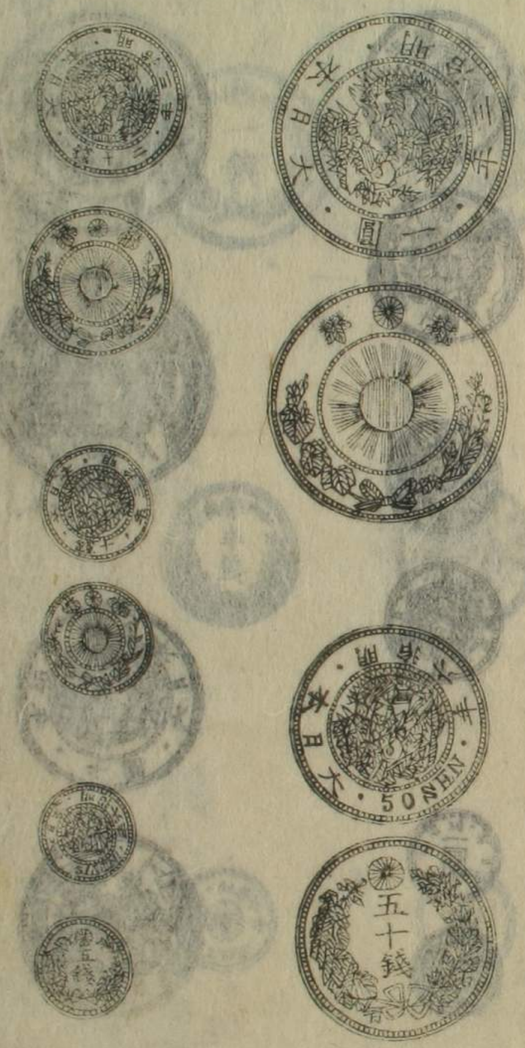
これハ蠶と養ひ、絲と繰る所なり。○數多の女皆朝早く起き、夜中までも眠らずして、髮も結ばず、日々息ふ間なく、働けり、○又二人の男ハ桑と、採る所なり、○此男ハ野より出でゝ、耕す人と、同じく、肘も脛も露なるまで、力を盡して、働けり、○此の如く、數多の男女の、苦勞して製するゆゑ、非ざれハ、絲も生ぜず、絹も得ることを能はず、汝等、暖かなる、衣と、著たるときハ、必蠶と養ひ、絲と取る人々の、苦勞を、忘るべからず、



右四品の貨幣と、錢といふ、幕府、政を執るとき
より今日までも、通用するもの是あり、



此五品の貨幣と、金といふ、幕府、政を執るとき、
通用せしものなり、



右五品の貨幣と、銀貨幣と云ふ、

右五品の貨幣と、金貨幣と云ふ、

右三品と、銅貨幣と云ふ、

此三種の貨幣ハ、朝廷の、發行よて當今の、通用か

り、
小銅錢一箇を、一厘といひ、十厘を、一錢といひ、百錢を、一圓といふ、故ゆ、十二錢半は、金貳朱ゆ當り、二十五錢も、一分ゆ當り、五十錢は、二分ゆ當たるなり、

小學讀本第一終

明治十六年六月六日飜刻御届
東京府平民
翻刻出版人　柳河梅次郎
日本橋區本町二丁目十番地